

末木 新〔著〕

シン・自殺論

——誰も自殺に追い込まれない社会の創り方

A5判上製・金剛出版

2025年12月刊

定価3,080円（税込）

評者＝松田慎之介（法務省矯正局更生支援管理官付）



脚注の多さがまず目を引く。見開きの半分以上を脚注が占めるページもある。しかし、そこには比喩やユーモアが散りばめられており、統計データや図表の多い本文とともに、硬軟織り交ぜて読者の理解を助けようとする徹底した配慮がある。本文を一読した後に注釈だけを読み進めてもまた面白い。

さて、私たちは、「死にたい気持ち」「自殺」という言葉を耳にしたとき反射的に相談のホットラインを思い浮かべる。「誰かに話す」「どこかにつながる」という対策はそれだけ共通認識となっているが、そこにはワンコールで相談が始まるという前提がないだろうか。しかし、本書によれば、ホットラインの着信率は想像より低く、数%から高くとも40%程度であり、半数以上の電話はつながらない現状があるという。

著者は、こうした確かなデータや知見とともに、自殺に関する統計、理論、社会的背景、政策、そして社会のあるべき姿などあらゆる論点に踏み込んでいく。帯の「〈自殺観〉と〈自殺対策〉の批判的更新」という記載からは挑戦的な書きぶりも想像するが、むしろ、複雑で多岐にわたる論点を冷静に見つめ、丁寧に説明していく筆致の奥には、本書の冒頭で語られる著者の苦悩や閉塞感にも似た感情が通底している。

自殺対策に限らず、施策や支援のリソースには限りがある。本書の議論は、単に自殺対策に資源を投入して支援を強化するという方向へは進まない。むしろ、ケアの担い手が持つ時間や気力が有限である以上、ひとつの支援を強めることが、別の誰かをケアする余裕を奪いかねないというジレンマが描かれる。新たな支援が、必ずしも個人や社会全体が享受する「福祉の総量」を増やすわけではないのである。個別の政策やその効果にとらわれて、個人の幸福や社会の在り方を見失いかねないという、「国家による自殺予防の副作用」の指摘は、制度や支援に携わる者のみならず、誰も無関係ではいられない問題提起である。

本書は、最後に「そもそも死にたくない社会」の実現に向けて、「人間は存在そのものに価値がある」という価値観を社会に根付かせる必要性を正面から問う。その問いに向き合うことは、人と社会のあわいに立つ臨床家や研究者、行政官たちの矜持であろう。そして、その価値観を目の前の支援へと結びつけるためには、個人を社会構造の中で捉える視点が不可欠である。社会の狭間に位置する臨床心理学というミクロな営みにおいて、公衆衛生や政策というマクロな視点は、個人の孤独を大局的に捉え直す補助線を引いてくれる。

読後、書店に立ち寄り、古典であるDurkheimの『自殺論』（中公文庫）を手にとった。700ページを超える分厚さに圧倒されつつ、ページをめくると、こちらも緻密な脚注によって、徹底して本文に説明が加えられている。『シン・自殺論』は、自殺という事象を精緻に描写した先達の精神を確かに引き継ぎ、私たちの自殺問題への理解とアプローチの解像度を一気に上げてくれる一冊である。